


<p>団体名</p>	<p>NPO法人Sharing Caring Culture</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>子ども多文化交流事業</p>	
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■ 活動風景</p>	
<p>● 望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>ビジョン（実現したい未来）： マイノリティとしてサポートされがちな外国籍や外国につながる人々が主体的に発信する側に立ち、さまざまな文化をまとった人たちが地域で協働する土壌のもと、在住外国人と日本人が文化的な違いを認め合い、共に地域づくりを進めることで新たなものを生み出す創発的な社会を目指す。</p>		<p>親子クッキング</p>  <p>11月21日、対面での親子クッキングを1年ぶりに再開。オンラインよりも子どもの表情、様子、行動が手に取るようになった。</p>	
<p>● 団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>ミッション（社会で果たしたい役割）： 1）外国籍や外国につながる児童が自分の母語や母文化、ルーツに誇りを持てるよう、地域の中で多様な価値観にふれ、認め合う場をつくる。 2）日本語の能力や国籍に規定されず、自分らしさを持った個人として、個性を最大限に活かせる場をつくり、特に、外国籍の母親とその子どもたちの社会参加を促すことで、外国籍や外国につながる人々の潜在能力を地域で発揮する活動を行う。</p>			
<p>● 団体の活動基盤</p>	<p>● 人的資源：①外国人パートナー会員/サポーター：8名→30名/3名→30名 ②プログラムデザインマネジメント（事務局）スタッフ1名→4名 ● 物的資源：①協賛企業の獲得 9社→30社 ②正会員、賛助会員、寄付会員 31人→90人 ● 活動資金：①自主財源（会費・寄付・自主事業）の比率を80%程度とする ②事業規模：146万円 →500万円 ● 情報：①情報共有の一元化 ②サポーターを募集、関われる程度を確認（登録）、サポート内容の依頼、メンター制にてヒアリング</p>			
<p>■ 活動報告</p>			<p>■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>	
<p>コロナ禍で、特に調理を伴う企画の実施が厳しい状況で計画通りには進まない状況だったが、オンラインでの親子クッキングを実施するなど、模索しながらできることに取り組む一年だった。そのような状況でも、多言語読み聞かせやハロウィン、イースターなどの世界の行事のほか、一年振りの対面での調理の実施にあたっては、区役所や地域の施設（都筑民家園、都筑中央公園、仲町台地区センター）の協力により、無事に遂行することができ、地域のつながりに心から感謝したい。 また、今年度は、同じ都筑区を拠点とする認定NPO法人あっとほーむの協力のもと、学童の児童向けにプログラムを3回提供。オンラインでのプログラム提供の経験を積むことができ、今後、本事業を広く学童や教育施設で展開していくにあたり、大変貴重なフィードバックをいただいた。二年間に及ぶ子ども多文化交流事業の実施で、本事業のコンテンツとしての価値を感じることができたので、今後は、オンライン化もしながら、地域を問わず実施し、より多くの子どものために多文化理解につながる体験の機会をつくっていききたい。</p>			<p>2019年度に参加した児童人数は、103名だったが、2020年度は153名となり、前年度よりも50名増加。オンラインでの実施により、地域を問わず参加者が増えたことが大きい。目標については、特に多言語読み聞かせに参加した高学年の日本人児童は、「言葉がわからなくても楽しめた」との感想が綴られ、年下のドイツ人の子どもにけん玉の遊び方を教える姿が印象に残った。また、活動報告会として実施したアジア文化紹介の企画においても、日本人児童のほか、中国、インド、ドイツにルーツがある子どもたちが参加し、日本の盆栽づくりのほか、インドのクイズにペアで取り組んだり、中国のドラゴンダンスやタイの踊りを体験したりした。様々な文化的な背景を持った子どもたちが一緒に活動すること自体が貴重な体験で、違いを認め、受け入れるきっかけになったことが毎回の子どものアンケートから読み取れた。地元の公立小学校に通うインド出身の小学一年生の男の子は、「どうして自分の肌は黒いのか」と母親に尋ねたそうで、違いに気づき、意識し始める年齢だからこそ、こうした多様性を認め合う取り組みを実施していく必要があると実感した。</p>	
<p>■ 事業を通じて得られたノウハウ</p>			<p>■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>	
<p>オンラインでのプログラム実施にあたって必要な準備、流れ、留意することなどがわかり、この一年での経験を通して、仕組み化できたことが一番のノウハウとなった。また、講師キャリアのある本事業のプログラムデザイナー3名は、年間を通して、魅力的なコンテンツを作り込み、これらを多文化理解教育コンテンツとして、今後、学童等で売り込むことができるほど、質を高めることができた。また、講師に求められるスキルや役割は何かも明確になった。 今後、講師を増員する場合、まずはOJTのような機会をつくり、アシスタント的な立場で様子を見ながら、徐々に講師として立ち立ってできるフォロー体制をつくる必要があると分かってきた。担い手を育成するという点では、毎回プログラムを録画し、今後は、研修にも役立てていきたい。</p>			<p>社会的なインパクト評価をしたいという思いを持ちながらも、対面での実施に限りがある中で継続的に児童の変化を読み取ることが難しいという前年度の課題から、教育現場のような場で調査に協力してもらうことを発案、今回の学童でのモニター調査の依頼が叶い、多文化理解教育を学童で実施するニーズを読み取ることができた。また、今回は、当団体の外国人主婦の講師が学童へのプログラムを提供し、学童の児童が多文化交流体験をしたが、学童側から、今後は外国ルーツの子どもたちと学童の子どもたちが接触する機会を作ってほしいというリクエストをいただいた。 当団体では、地域の公園でネイチャーゲームをする活動を外国ルーツの子どもたちを含め実施しており、多文化理解に限定せず、遊びを通して、多様な子どもたちが交流できる機会を学童とともに今後、協業していきたい。</p>	
<p>この1年間の活動を通じて</p>			<p>多文化理解プログラムとして、子どもたちが多様な文化にふれられるコンテンツをパッケージ化</p>	<p>を達成しました。</p>
<p>■ 受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			<p>毎回、冒頭で「違いと似ているところ」を探すように子どもたちに伝えていきます。インド親子クッキングでは、日本のお米とインドのお米を比べ、手に取って触るだけではなく、自分で匂いを嗅いでいる子どももいました。違いだけでなく、似ているところにも着目し、共通点を見出すことで多文化への興味が促されたようです。</p>	